

2021.7.15. 筑波大学 オンライン
令和3年度大学図書館員長期研修

大学図書館の学習支援

1

長澤多代

三重大学 情報教育・研究機構 情報ライブラリーセンター 研究開発室

発表のアウトライン

1. 大学教育改革
2. 大学図書館の学習支援機能
3. 情報リテラシー教育を検討するための視点
4. ケーススタディからみる教員との連携
 - アーラム・カレッジ
 - ミシガン大学
 - タンペレ大学
5. 今後の学習支援のために大学図書館に求められること



大学教育改革

1.1 2040年に向けた高等教育の将来構想

高等教育を取り巻く状況や社会が大学に求める役割の急激な変化

学修者本位への教育への転換

教育・研究における多様性と柔軟性の確保

「学び」の質保証の再構築

あらゆる世代が学ぶ「知識基盤」の確立

多様な機関による多様な教育の提供

高等教育のコストの可視化とあらゆるセクターからの支援の拡充

1.1 予測不可能な時代を生きる人材像

予測不可能な時代に，直面する課題を解決することができるのは「**知識**」とそれを組み合わせて生み出す「**新しい知**」

普遍的な知識・理解
+

汎用的技能

基本的な認知能力: 読み書き計算, 基本的な知識・スキルなど

高次の認知能力: 問題解決, 創造性, 意思決定, 学習の仕方の学習など

対人関係能力: コミュニケーション, チームワーク, リーダーシップなど

人格特性・態度: 自尊心, 責任感, 忍耐力など




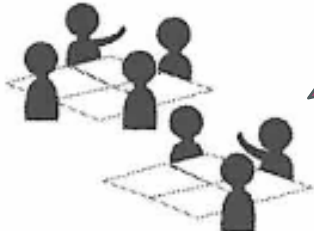
生涯にわたって学習をしながら，職業人として，市民として，主体的に社会とかかわる人材の育成

1.2 アクティブラーニングの一般的特徴

- 学生は、授業を聴く以上の関わりをしている
- 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれている
- 学生は高次の思考(分析, 総合, 評価)に関わっている
- 学生は活動(例: 読む, 議論する, 書く)に関与している
- 学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きが置かれている
- 認知プロセスの外化をともなう

「行為をすること + 行為について振り返ること」をとおして学ぶこと

1.2 アクティブラーニング型授業の類型

授業の形態・類型		授業の特徴	
伝統的授業	講義型	教師から学生への一方向的な知識伝達型講義。教師指導。	
	講義中心型	話す・発表するといった活動はないが、コメントシートなどを用いた教師－学生の双方向性を組み込んだ講義中心の授業。教師主導。	
アクティブラーニング型授業	講義＋AL型	どちらかと言えば教師主導であるが。講義だけでなく、学生の書く・話す・発表する等の活動も組み込んだ授業。	
	AL中心型	徹底的に学習パラダイムに基づいた学生主導の授業。	

習得重視型

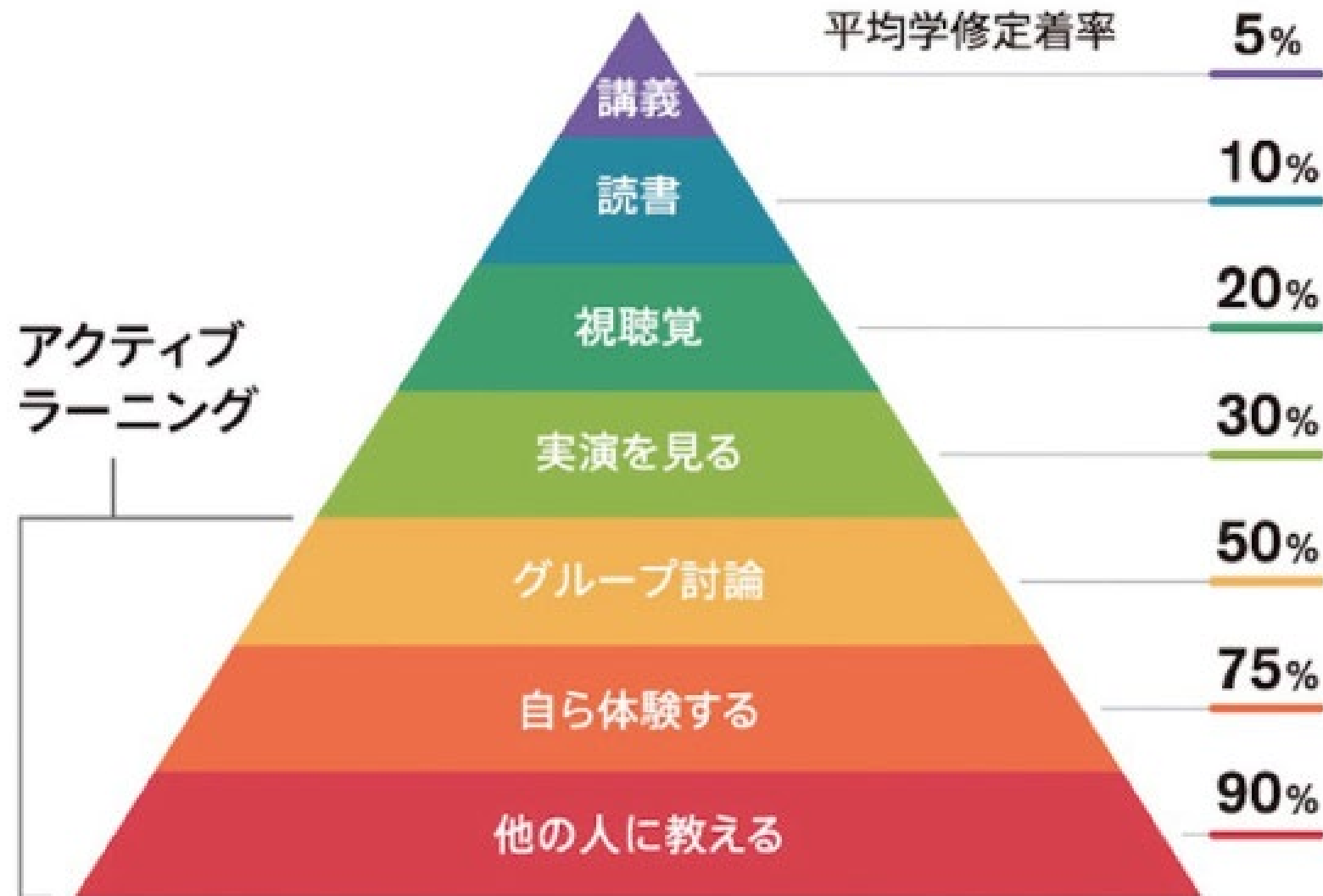
探究重視型

図 2-1 アクティブラーニング型授業の位置づけと類型

(溝上, 2016, p.36)

*ALは「アクティブラーニング」を指す。

ラーニングピラミッド



出典: The Learning Pyramid. アメリカ National Training Laboratories

1.2 大学生の学修時間：単位制度

1 単位は①と②の合計で標準45時間の学修を要する学修内容
(大学設置基準 第21条)

- ① 教員が教室等で授業を行う時間
- ② 学生が事前・事後に教室外において準備学修・復習を行う時間

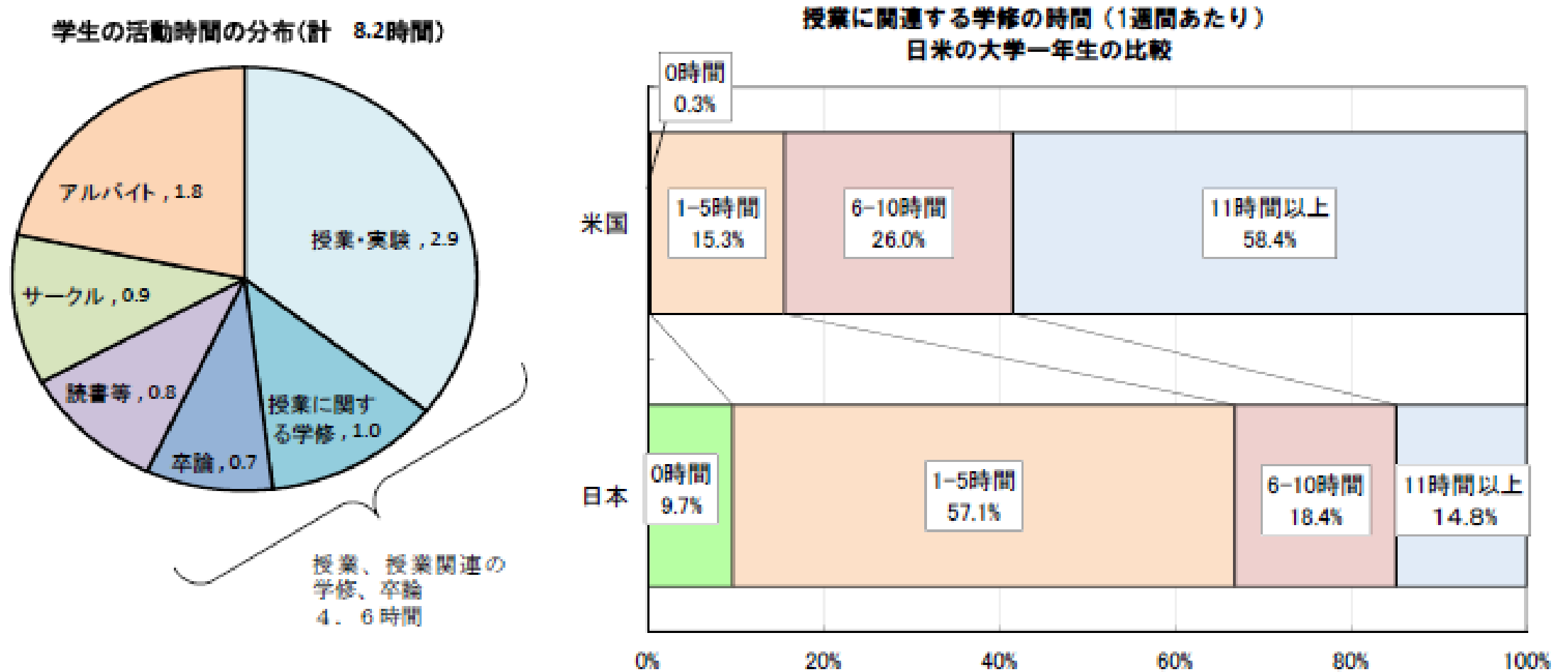
45時間＝1週間あたりの学修時間に相当

学修：単位制にもとづく正課教育（授業）の枠内に限定した学習

学習：学修の枠をはみ出る学習

(溝上, 2015; 土持, 2012)

1.2 大学生の学修時間：学生調査



東京大学 大学経営政策研究センター 『全国大学生調査』(2007, サンプル数44,905人)
(中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』2012)

その後の調査でも「授業に関連する学修の時間」にほとんど変化がない(金子, IDE, 2020)

1.2 アクティブラーニング型授業

アクティブラーニング型の授業への転換

(中央教育審議会, 2012/松下, 2015)

授業のための事前の準備 資料の下調べや読書, 思考, 学生同士のディスカッション, 他の専門家等とのコミュニケーション

授業の受講 教員による直接指導, 教員と学生, 学生同士の対話など

事後の展開 授業内容の確認や理解の深化のための探求等

事前の準備, 授業の受講, 事後の展開をとおした
能動的な学修過程に要する十分な**学修時間の確保**が不可欠

「主体的な学修のベースとなる図書館の機能強化」*

高次の思考をするためには, それに見合う知識の獲得が必要になる

1.3 内部の質保証・外部の質保証

内部の質保証

自己点検・評価ができる大学へ

3つのポリシー＋ α の策定, PDCAサイクル

計画(PPLAN): 各学部や学科で観点別にディプロマ・ポリシー, カリキュラム・ポリシーを策定・公開する。

実施(DO): 策定したディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーにもとづいて教育を実施する。

評価(CHECK): 教育システム, 学習成果等を検証する。授業方法, 成績評価基準やその方法に関する事項で, 観点別の学習の到達目標を備えたシラバスを作成して公開したり, 観点別の学習の到達目標ごとの成績評価基準を策定・公開する。

実行(ACTION): 評価結果にもとづいて改善方策を策定・実行する。

公的な質保証

- 事前規制→事前規制＋事後確認の併用
- 認証評価*

1.4 大学図書館の学習支援・教育支援

学修成果の向上

- 情報リテラシー関係のポリシーの策定
- 情報リテラシー教育のカリキュラムへの統合
- 科目関連の情報利用指導, 卒業論文のための情報利用指導
- 入学時のオリエンテーション, 初年次学生対象の図書館ガイダンス

授業外(教室外)の学修時間を確保するための学習支援環境の整備

- ラーニングコモンズ, ファブラボ

FD(ファカルティ・ディベロップメント)等による教員の支援

- 新任教員オリエンテーション, 教育開発関係のワークショップ

SD(スタッフ・ディベロップメント)等による図書館職員の専門性の向上

- 高等教育+ペダゴジーについての知識とスキル
- リーダーシップ&マーケティングについての知識とスキル

2

大学図書館の学習支援機能

2.1 情報リテラシーの定義

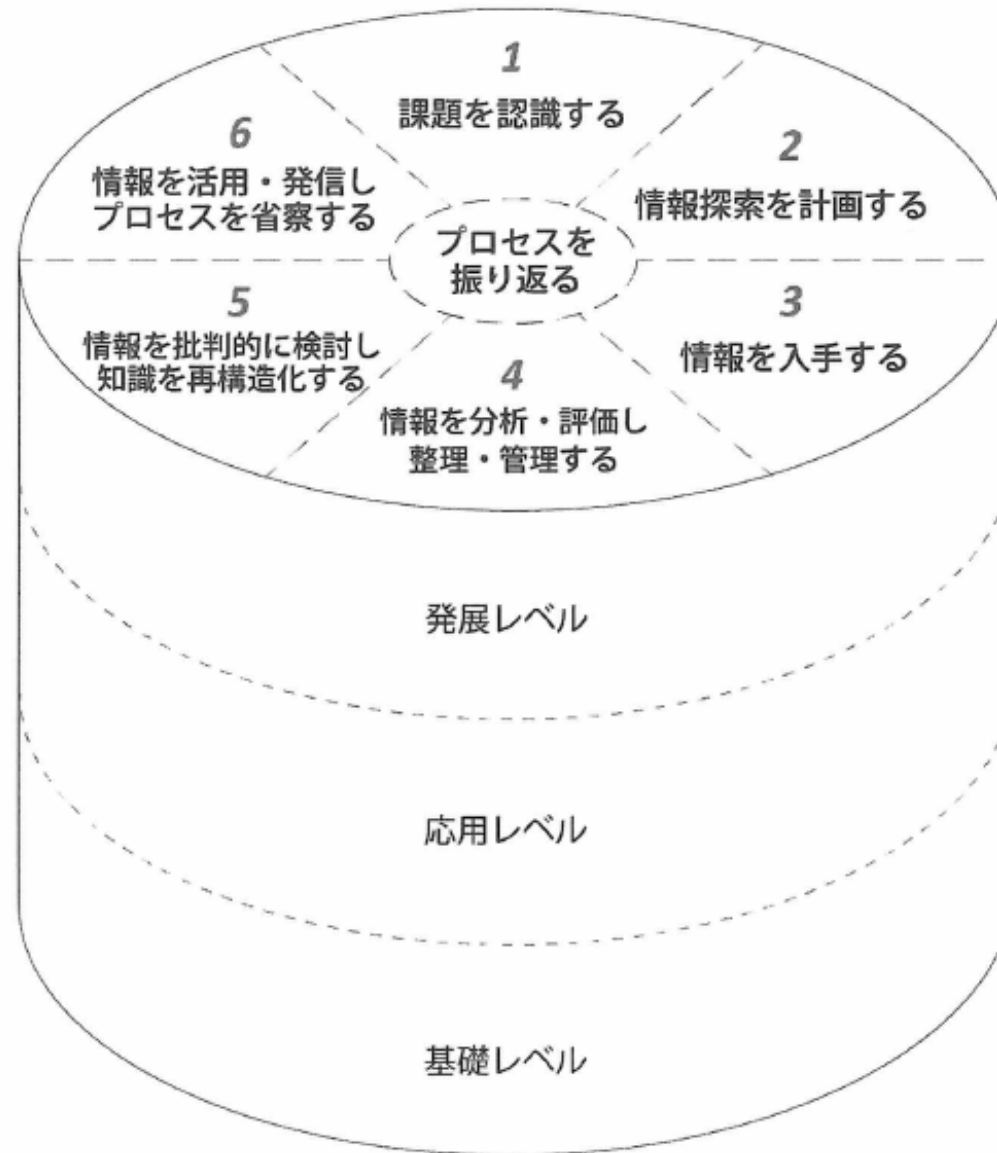
- 高等教育の学びの場において必要と考えられる情報活用能力。課題を認識し、その解決のために必要な情報を探索し、入手し、得られた情報を分析・評価、整理・管理し、批判的に検討し、自らの知識を再構造化し、発信する能力。
(高等教育のための情報リテラシー基準(2015年版), 国立大学図書館協会)
- 情報を振り返りによって気づきを得たり, 情報がどのように生産され価値を持つようになるのかを理解したり, 新しい知識を創造するときや学習共同体に倫理をわきまえて参加するときには情報を活用したりするのを包含する一連の能力。
(Framework for Information Literacy for Higher Education, ACRL, 2015)
- ひとりひとりが情報関連のタスクに取り組むために必要になる一連のスキルや能力を含む。印刷資料だけでなく, デジタル・コンテンツ, 画像/映像, 発話された言葉を含むあらゆる形態の情報に関わる。
(CILIP Definition of Information Literacy 2018)

2.2 『高等教育のための情報リテラシー基準(2015年版)』

6. 情報を活用・発信し、プロセスを省察する: 社会倫理に則り、合法的に情報を活用・発信し、情報の受け手と適切なコミュニケーションを行う。また、情報活用行動全体を省察する。

5. 情報を批判的に検討し、知識を再構造化する: 整理した情報を批判的に検討することで自らの知識を再構造化する。

4. 情報を分析・評価し、整理・管理する: 収集した情報を批判的に分析・評価し、情報を整理・管理する。



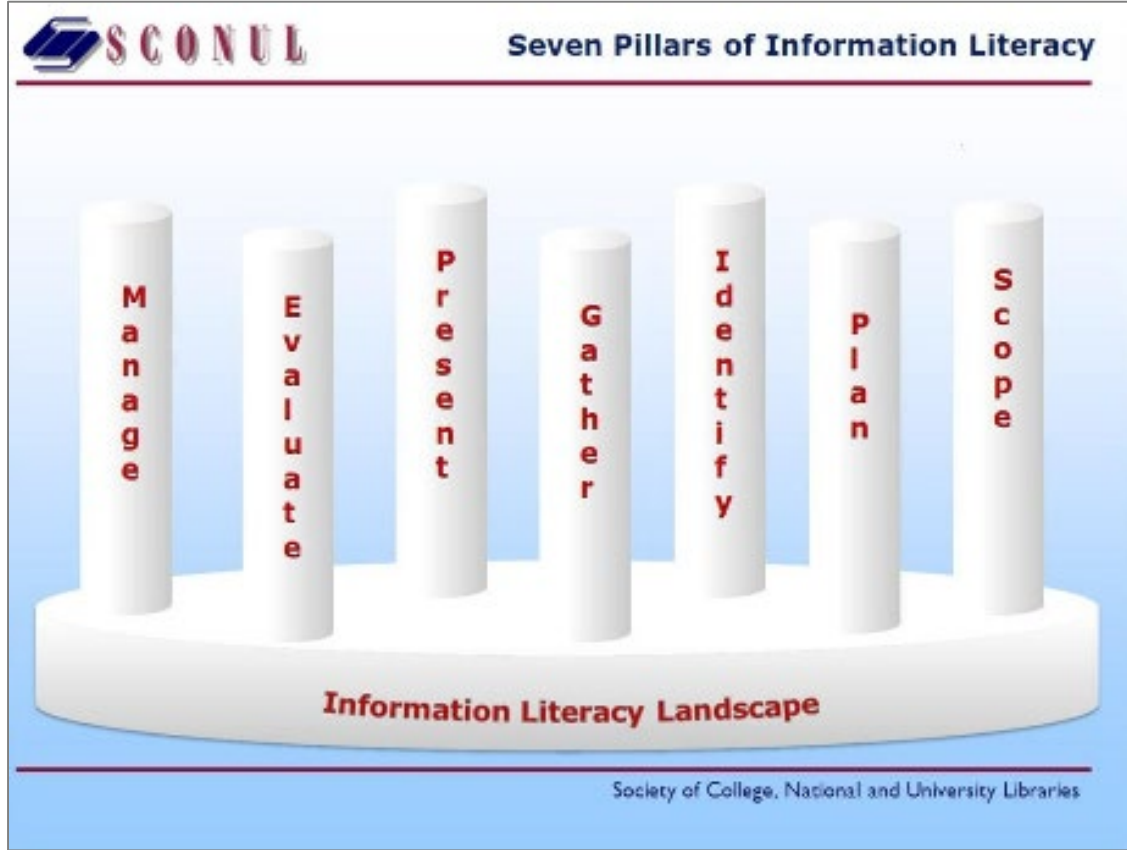
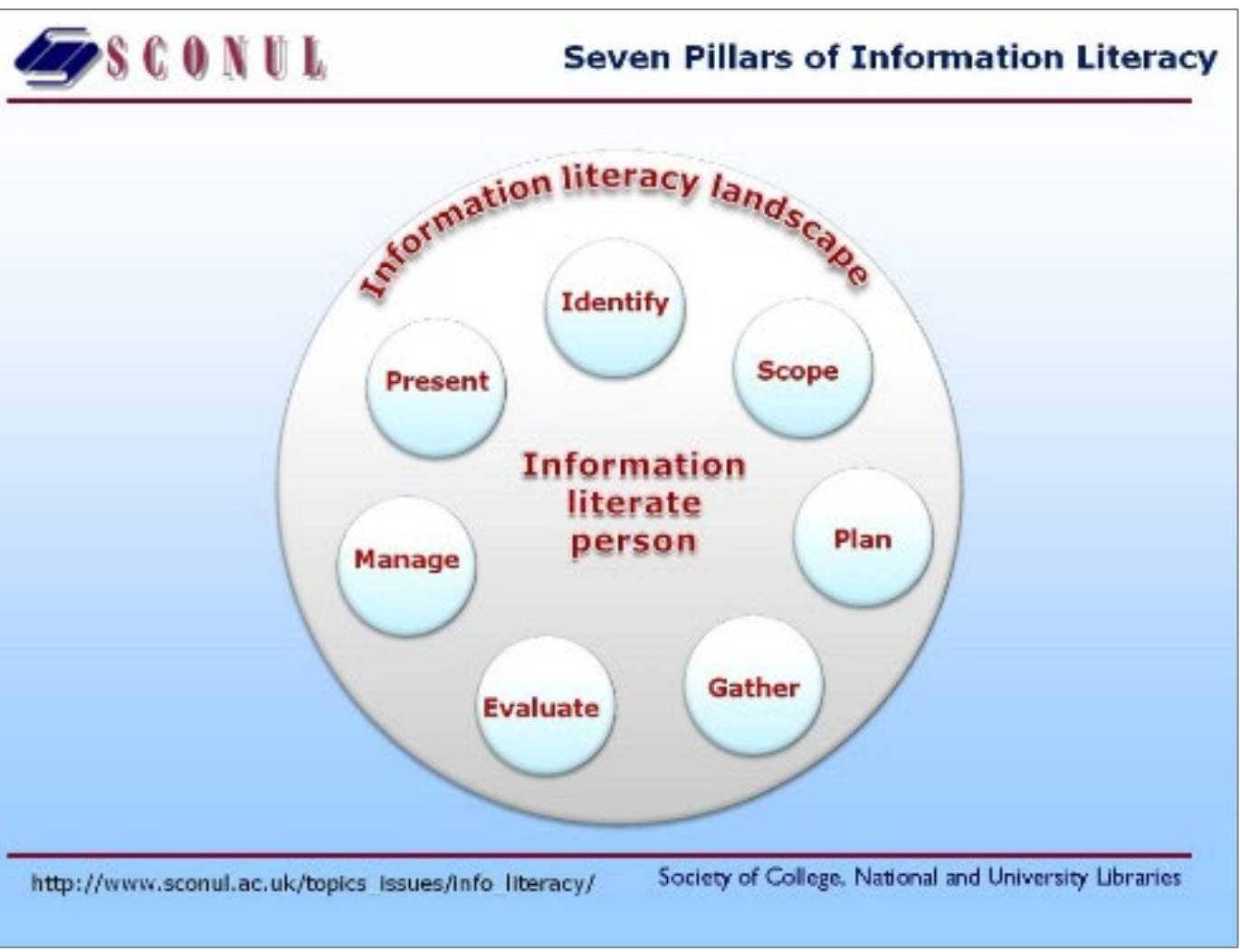
1. 課題を認識する: 課題を認識し、その解決に必要な情報の範囲を定める。

2. 情報探索を計画する: 課題を解決するために必要な情報を合法的・社会倫理的に適切に、かつ経済的・効率的に探索する計画を立てる。

3. 情報を入手する: 探索計画に基づき、課題を解決するために必要な情報を適切・効率的に入手する。

2.2 情報リテラシーの7つの柱

(The SCONUL Seven Pillars of Information Literacy, Core Model for Higher Education)



2.2 高等教育のための情報リテラシーの枠組み

(Framework for Information Literacy for Higher Education) (ACRL, 2015)

情報資源は、創り手の専門知識や信用性と関係しており、情報ニーズや使用するコミュニティによって、評価が異なる

Authority is constructed and contextual

情報を創造するプロセスは多様で、その結果も多様になる

Information creating as a process

情報は多面的な価値を持つ Information has value

問い続けることで、問い、研究方法、ものの見方を高度化させていく

Research as inquiry

学術・専門職共同体において、新しい見解や発見について対話を重ねる

Scholarship as conversation

情報ニーズの出所、領域、背景を考慮して、最も適した探索の戦略を選択する

Searching as strategic exploration

2.3 情報リテラシー教育：図書館利用教育ガイドライン

(日本図書館協会・図書館利用教育委員会, 2003)

領域	目標	方法
印象づけ	以下の事項を認識する： 図書館は生活・学習・研究上の基本的な資料・情報の収集・蓄積・提供機関 図書館は生涯学習を支援する開かれたサービス機関 など	ポスター, ちらし 大学のサイン 広報誌 オリエンテーション ほか
サービス案内	以下の事項を理解する： 施設・設備の配置 図書館員による専門的サービスの存在 行事の案内 など	図書館オリエンテーション 館内見学ツアー 館内のサイン パンフレット ほか
情報探索法指導	以下の事項を理解し習得する： 情報の特性, 情報検索の原理 レファレンス・サービスの利用法 資料の基本タイプと利用法(図書, 雑誌, 新聞, データベース) など	
情報整理法指導	以下の事項を理解し習得する： 情報内容の抽出と加工(要約, 引用など) 発想法(ブレインストーミング) 資料の分類とインデックスの作成法(キーワード, 見出し語の付与)など	レファレンスデスクでの支援 ワークショップ 授業やゼミでの指導 チュートリアル パスファインダー ほか
情報表現法指導	以下の事項を理解し習得する： 情報倫理(著作権, プライバシー, 公正利用等) レポートの作成法(構成, 書式, 引用規則等) プレゼンテーションの技法 など	

2.4 情報リテラシー教育を設計するプロセス

①認識する	学習者のニーズを明らかにする 受身方式, 相互作用方式, 事前対策方式
②分析する	利用できる情報資源など, 現状を分析する
③設定する	学習目標や到達目標を設定する 目的, 学習目標, 到達目標
④設計する	学習目標の達成に適切な指導方法, 評価方法, 教材を設計する
⑤導入する	指導計画を実施する
⑥評価する	指導中もしくは指導後に, 学習成果を評価する
⑦見直す	指導内容, 指導方法が適切であったのかどうかを評価し, 次回の改善計画を立てる 総括的評価+形成的評価

2.4 学習目標を設定する

目的: 指導をとおして、何を達成したいのか(全体の趣旨)

ウェブサイトを批判的に評価する方法を指導する

学習目標: 支援対象者が指導を受けた後にできるようになること + 指導方法

50分のセッション受講後に、研究ニーズに応じた信頼性の高い適切なウェブサイトを選択できるようになる

動詞の例: 知る / 認識する / 理解する / 感ずる / 判断する / 価値を認める / 評価する / 位置づける / 考察する / 使用する / 実施する / 適用する / 示す / 創造する / 身につける…

到達目標: 支援対象者が学習目標を達成したことを示す方法

情報の評価項目を、ウェブサイトの探索時に応用できる

動詞の例: (知識の領域) 具体的に述べる / 説明する / 分類する / 比較する / 例を挙げる / 関連づける / 解釈する / 使用する / 応用する / 適用する / 演繹する / 結論する / 批判する / 評価する…
(態度・習慣の領域) 行う / 尋ねる / コミュニケーションする / 示す / 見せる / 表現する…
(技能の領域) 感ずる / 始める / 模倣する / 熟練する / 工夫する / 実施する / 行う / 創造する / 操作する / 動かす / 手術する / 触れる / 触診する / 調べる / 準備する / 測定する…

3

情報リテラシー教育を設計する視点

高い学習成果を得られる情報リテラシー教育の実現には、
情報リテラシー教育を授業に組み入れる、
教員と図書館員が連携する、ことが重要になる

3.1 授業と図書館利用の関連づけ：プロセス・モデルの比較表

	国立大学図書館協会の 基準	SCONULの 基準	クールソの モデル	アイゼンバーグの モデル
課題のテーマを 設定する	①課題を認識する	Identity	①開始 ②選択 ④形成	①課題の設定
情報探索の手順 を考える	②情報探索を計画する	Scope Plan	③探索 ⑤収集	②情報探索戦略
情報を探索する	③情報を入手する	Gather		③情報源にあたる
情報を評価(取捨 選択)・統合する	④情報を分析、評価し、 整理・管理する	Evaluate		④情報の獲得
	⑤情報を批判的に検討し、 知識を再構造化する	Manage		⑤情報の統合
情報を表現する	⑥情報を活用・発信し、 プロセスを省察する	Present	⑥提示	⑥評価
成果とプロセス を評価する				

3.1 情報探索プロセス・モデル

(Kuhlthau, 2005 / 三輪, 2003)

高校生の情報探索行動の調査をもとに，感情，思考，行為の3つのレベルをモデル化

段階	第一段階 タスク 定義	第二段階 トピック 選択	第三段階 漠然とした 情報探し	第四段階 フォーカス 形成	第五段階 情報収集	第六段階 情報探し 終了	執筆開始
感情	不確実 不安	漠然とした 希望	恐怖・疑い フラスト レーション	明快	方向性 自信	解放感	満足 不満足
思考	漠然 -----> 明快 関心が高まる						
情報行動	関連情報を探す -----> 適合情報を集める 焦点が絞られる						

3.1 Big6スキルズ・モデル

1) 課題を明確にする:

問題の定義, 情報ニーズの識別

2) 情報探索の手順を考える:

情報源の範囲や利用の順位を決定

3) 情報源の所在を確認し収集する:

情報源の所在の確認とアクセス

4) 情報を利用する:

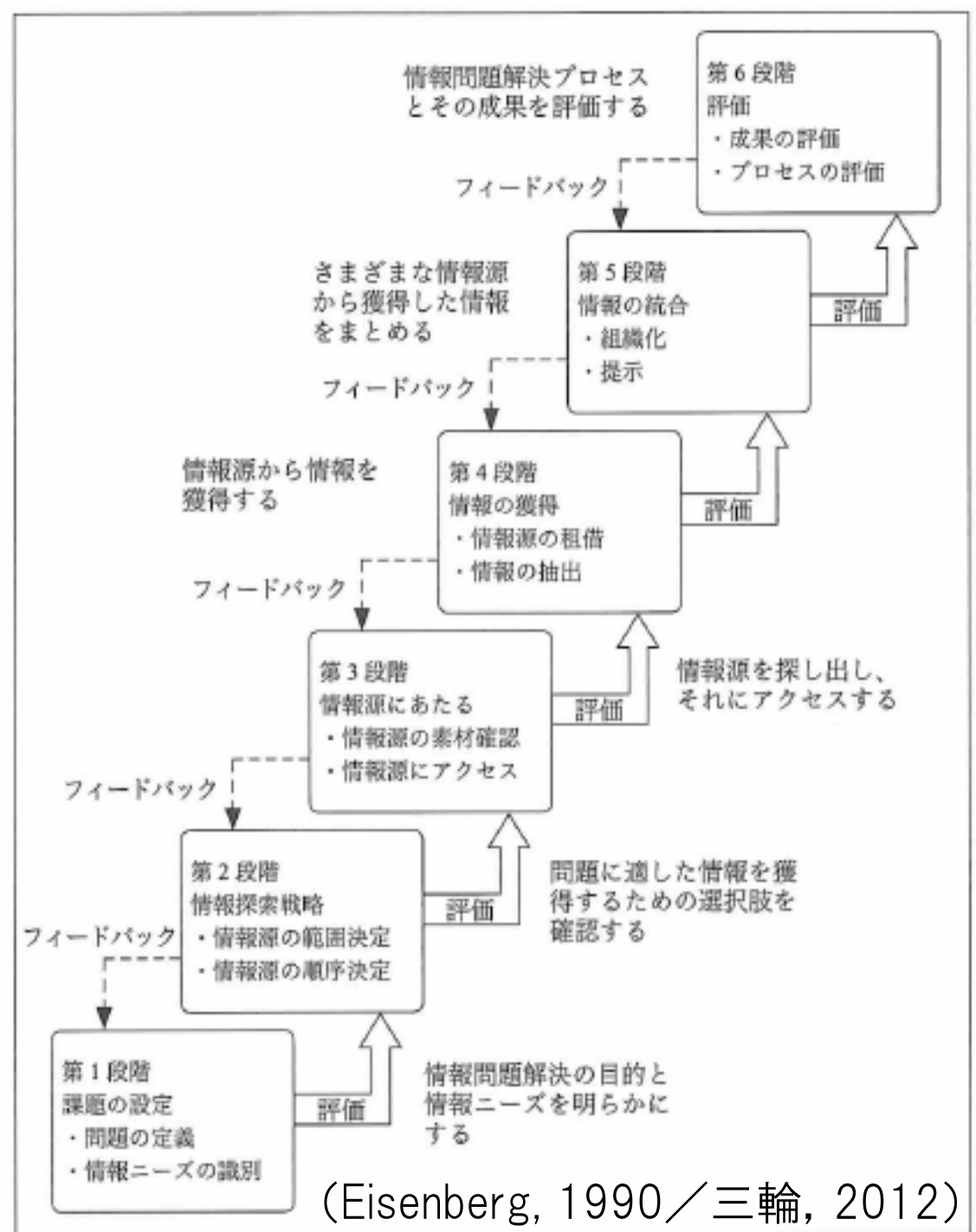
情報源の咀嚼, 情報の抽出

5) 情報を統合・再構成する:

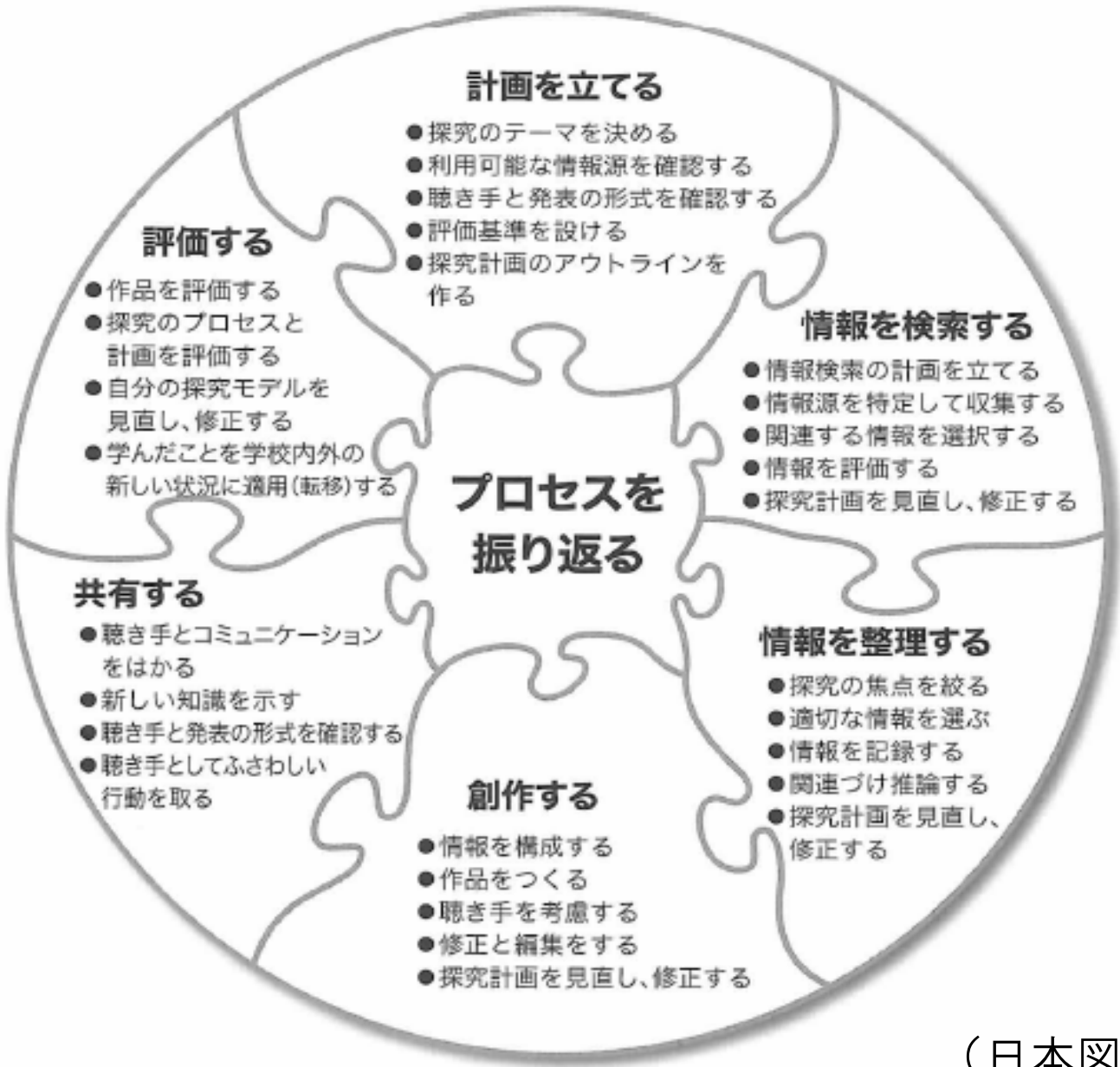
組織化, 提示

6) 評価する:

成果とプロセスの評価



3.1 カナダ・アルバータ州の探究モデル



3.2 大学教育における教員と図書館員の連携

① 教育開発(科目開発, カリキュラム開発, 組織開発)に参画する

科目開発: 個々の教員による授業設計, 教材開発, 指導方法
カリキュラム開発: 教務委員等によるカリキュラムの設計
組織開発: 大学のポリシーの策定, 学習教育環境の整備

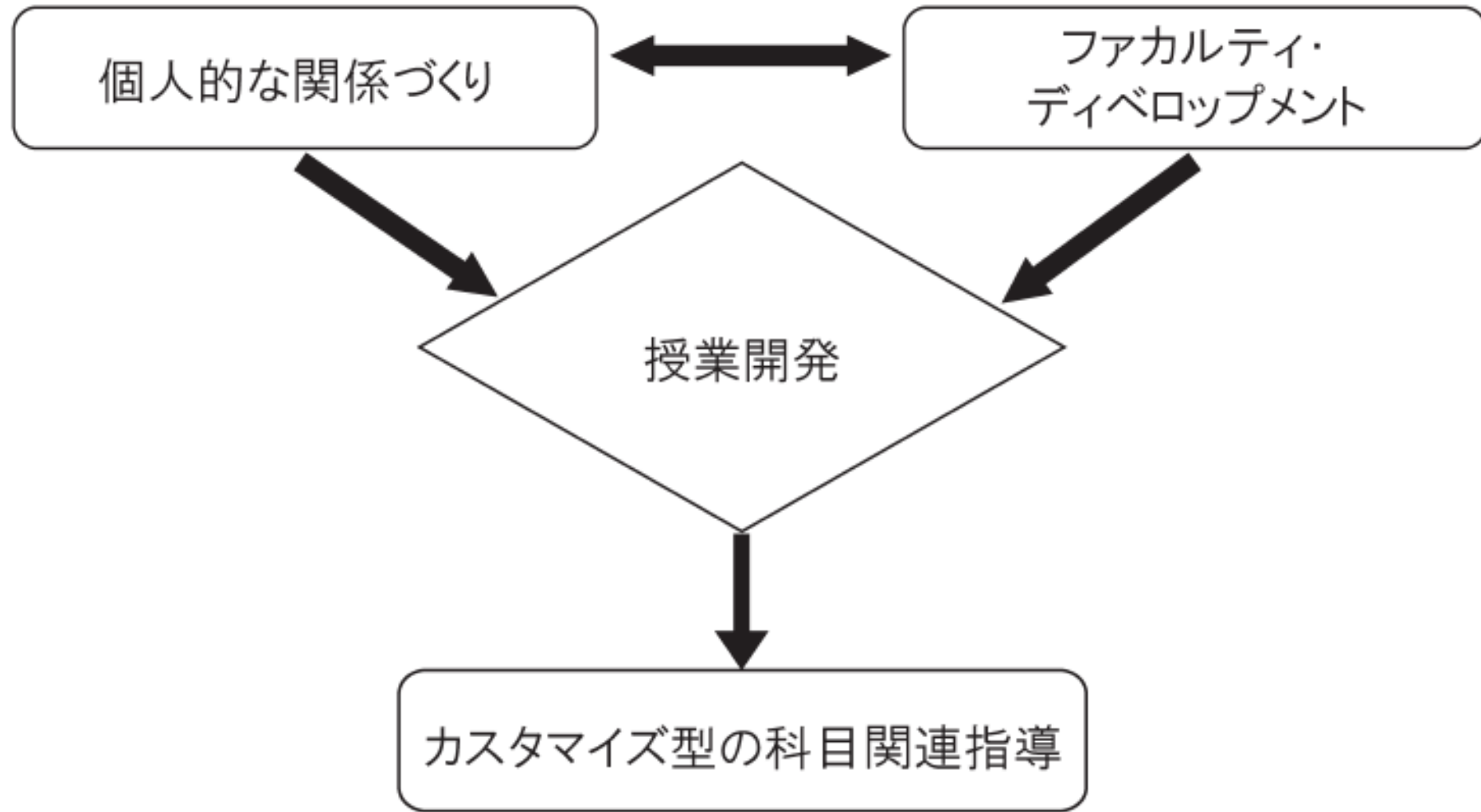
② 教員の図書館観を理解する / 教員の教育・研究活動を支援する

③ 図書館員の資質向上を図る / 大学図書館の支援体制を強化する

エンベディッド・ライブラリアン, ブレンディッド・ライブラリアン,
コピーライト・ライブラリアン...

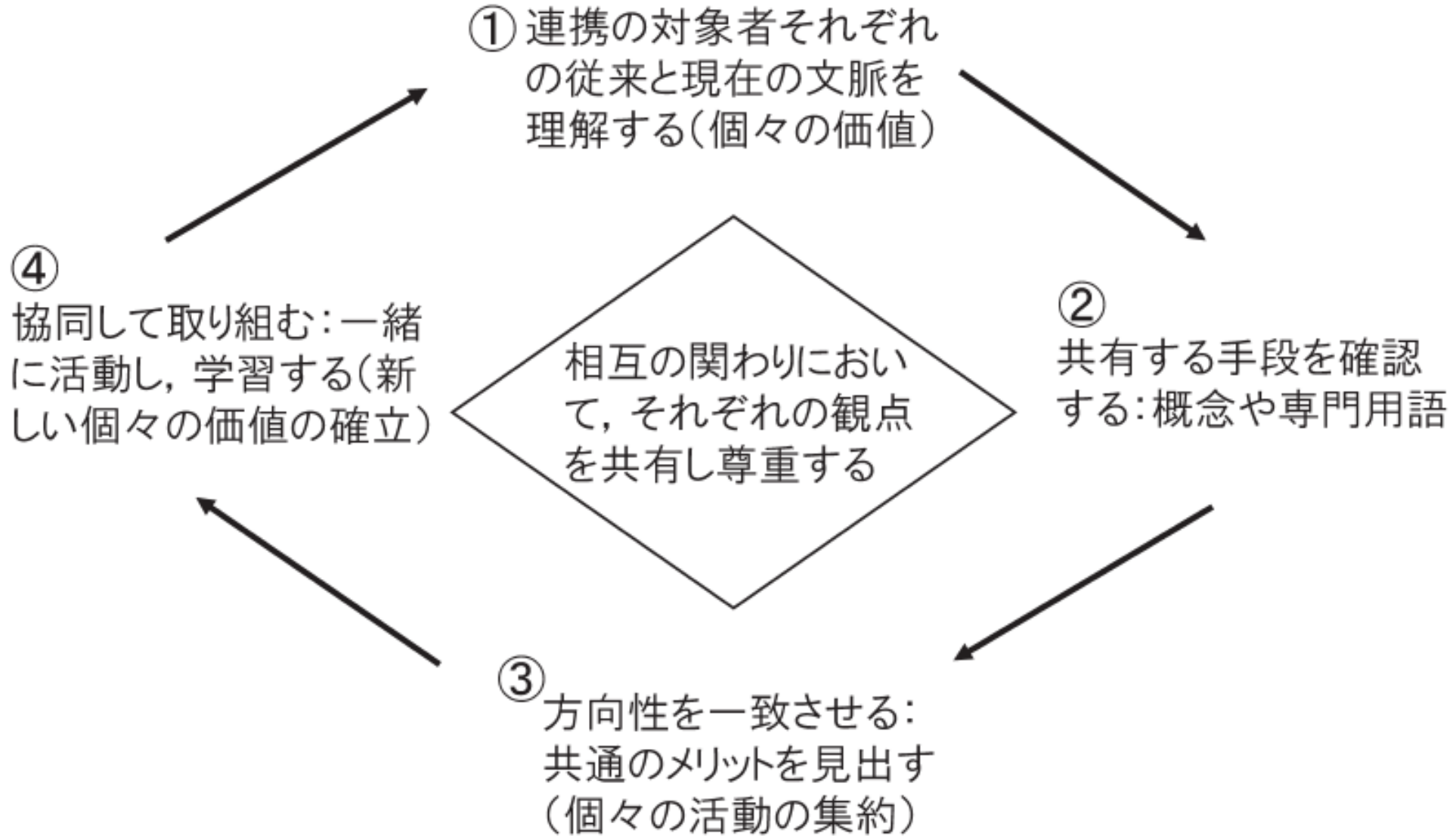
④ 教員と図書館員の連携に影響を与える大学図書館内, 大学内, 社会の要因について理解する

3.2 連携①-1 教育開発:科目開発



第3図 Blackらによる「図書館員と教員の連携モデル」
出典: Blackほか(2001)³⁷⁾, p. 218

3.2 連携①-2 教育開発:カリキュラム開発

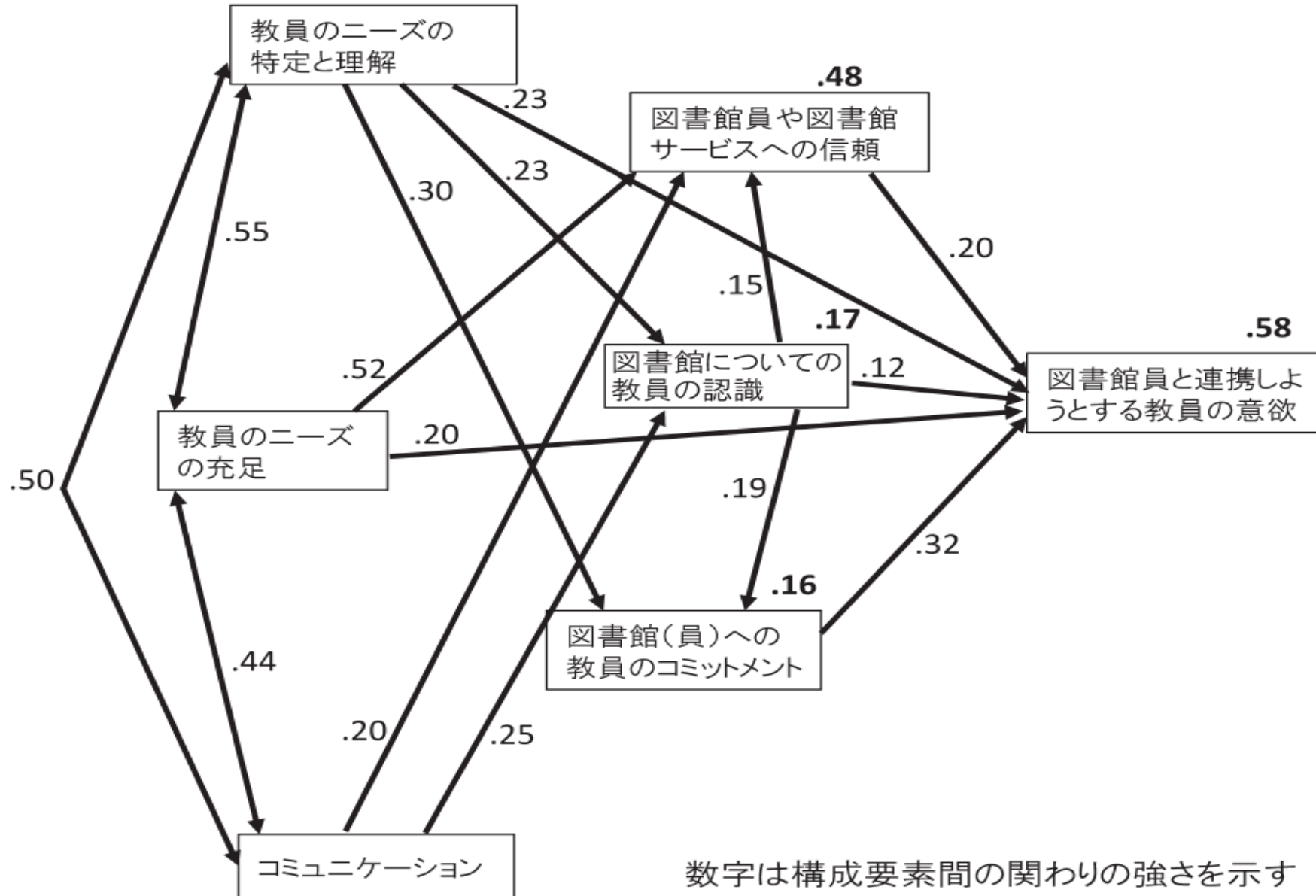


第4図 Machin による「連携のための象徴的相互作用論の枠組み」

出典: Machin ほか (2009)⁴³⁾, p. 148

(長澤, 2017)

3.2 連携② 教員の図書館員観



第6図 Amante らによる「図書館（員）と教員の関係モデル」（修正版）

出典：Amante ほか（2012）^{46）}，p. 98

（長澤，2017）

3.3 連携④ 図書館内外の条件

第2表 大学規模で情報リテラシーのプログラムを新規にデザインしたり導入したりするのに影響を与える公式・非公式の内的・外的要因

	内的	外的
公式	大学運営の仕組み 図書館員のファカルティの地位 大学の達成目標 図書館の達成目標 図書館長のコミットメント 予算	米国大学・研究図書館協会（ACRL）のガイドライン 情報リテラシーの基準 情報リテラシーのベスト・プラクティスのガイドライン 認証評価機関 州による決定事項 情報リテラシーを習得した人員の必要性 卒業生のための就職の機会
非公式	大学の組織文化や学内政治 図書館員のリーダーシップやマーケティング のスキル 既往の連携関係 （教育）開発のための連携 図書館が持つ大学観 図書館員の自己像	学内関係者の図書館（員）観 図書館や情報リテラシーに対する卒業生の認識

海外の大学における諸方策

- アーラム・カレッジ(米国・教養カレッジ)
- ミシガン大学(米国・研究大学)
- タンペレ大学(フィンランド・研究大学)

4.1 アーラム・カレッジのアプローチ: 科目開発

学生の情報リテラシー＋学習成果を向上させるため
高度な図書館サービスを提供するため

- 図書館サービスのファシリテーターとしての図書館員
- 教員やカレッジのニーズを事前に明らかにした上で主体的に働きかける事前対策的なアプローチ
- 課題探究型の課題を与える教員への個別の案内
- 各科目にカスタマイズした情報リテラシー教育
 - 課題のテーマを反映した内容／教える好機(テーマを決定した直後)に実施日を設定／担当する教員を特定(Myライブラリアン)
- 教員に対する直接的な支援
 - 新任教員へのアプローチ／図書館(員)が協力的であることの印象づけ
- 教員との個人的な関係づくり

4.1 アーラム・カレッジのアプローチを支える条件

● 図書館の管理職(図書館長)のリーダーシップ

図書館専門職としての経験, 情報リテラシー教育の担当専任, 長い在職期間

● 図書館員の**重点業務**としての情報リテラシー教育

● 図書館員が持つ**ファカルティ**の地位

ファカルティ・ミーティングの構成員 / 全学の委員会の委員

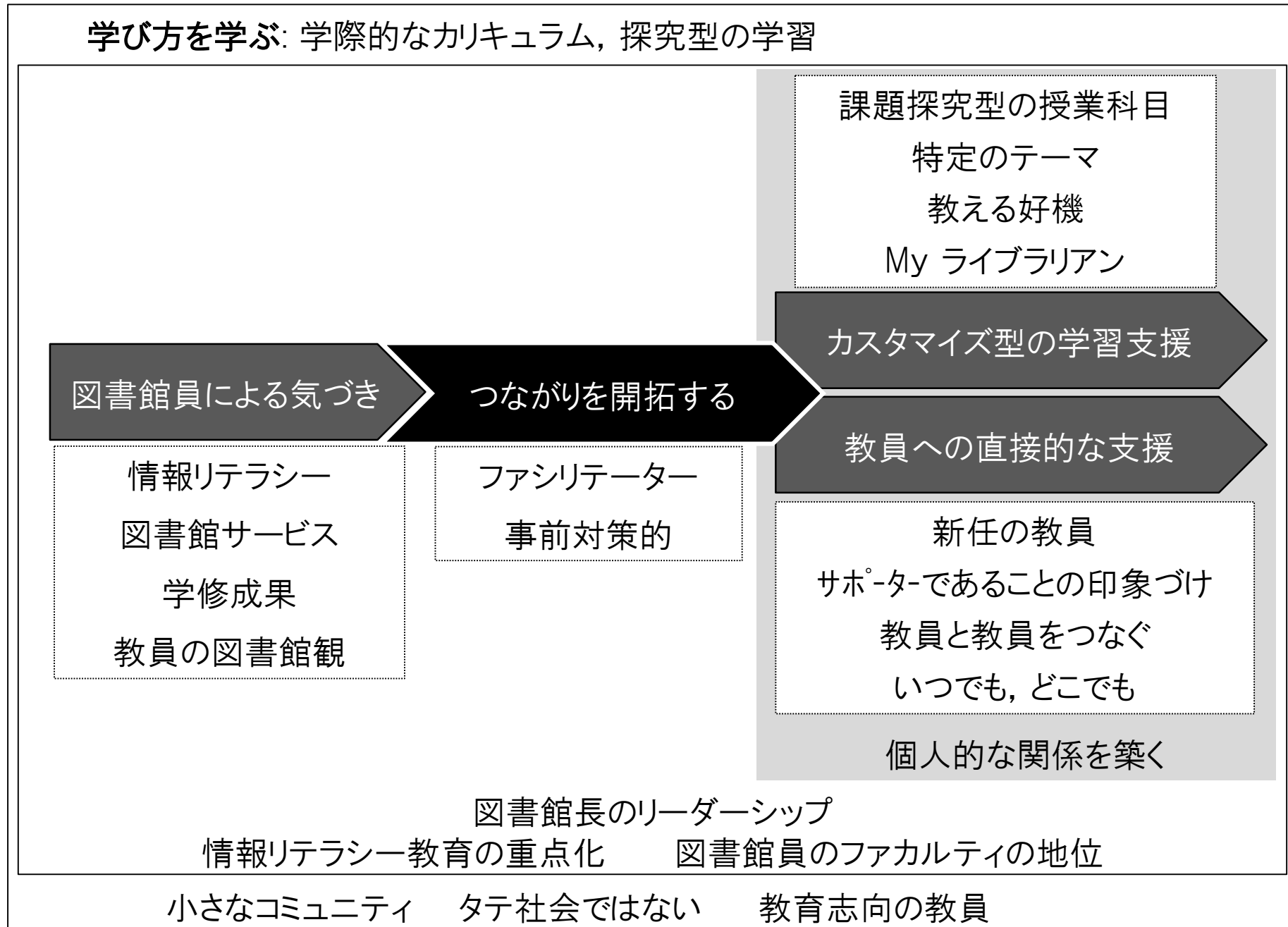
● **小さなコミュニティ**

● **タテ社会**ではない

● **教育に高い関心をもつ教員**



4.1 アーラム・カレッジにおける教員と図書館員の連携構築モデル:科目開発



(長澤, 2007, 2012a, 2012b, 2015, 2016b)

4.2 ミシガン大学のアプローチと条件

図書館が、教育活動や研究活動と一体化して活動するため

- **利用者が活動する場**におけるサービスの提供（フィールド・ライブラリアン）
研究科内にオフィス／日常的な交流をもとにニーズを把握／研究科と図書館の仲介
- **研究科の一員としての活動**
研究科内の会議やミーティングに参加／研究科主催の行事（学術，社交）への参加
- **専門分野の知識，高度なテクノロジーのスキル，社交的なパーソナリティを備えた図書館員**
特定の専門分野に関する修士号／新しい情報サービスやプロジェクトの提案
- **図書館の管理職（部長）のリーダーシップ**
伝統的な枠組みにとらわれない取り組みを模索／文献等の調査にもとづく提案／副学長や研究科長との予算交渉
- **大学の裁量経費による予算措置**
副学長（provost office）の裁量経費／通常経費としての予算措置 （長澤，2013）

4.3 タンペレ大学のアプローチ:カリキュラム開発

● 人的な支援体制の強化

(Asplund et al., 2014/ 千葉, 2014)

図書館員 (information specialist) の増員 / 情報リテラシー・コーディネーターの配備 /
大学主催の教育方法論コースの受講 / 週あたり2時間の資質開発の時間 (勤務時間内)

● 新カリキュラムと情報リテラシー教育の統合

大学のポリシーに情報リテラシーを組み入れ

各研究科のカリキュラム計画委員会への働きかけ / 必須科目としての情報リテラシー教育

I	目標共有のための オリエンテーション	<ul style="list-style-type: none">● 大学改革に関する全学のセミナー● 情報リテラシーを含む図書館サービスの案内● 教員によるベスト・プラクティスの共有
II	共通理解のための 基本的な情報提供	<ul style="list-style-type: none">● 各部署のカリキュラム委員会● 図書館員による情報リテラシー教育の改革案の共有
III	共有タスクを実現する ための分野情報の特定	<ul style="list-style-type: none">● 各部署のカリキュラムワーキンググループ● 分野に特化した情報資源の特定

4.3 タンペレ大学のアプローチを支える条件

● 図書館の管理職(図書館長)のリーダーシップ

学長との予算交渉／全学の教育協議会の専門委員(常任)／
研究科のカリキュラム計画委員会における説明

● 教育に携わっているという図書館員の自己認識

● 各研究科に配置されたカリキュラム・コーディネーター

● 大学内における大学改革のビジョンの共有

● 「人が資源」という価値観

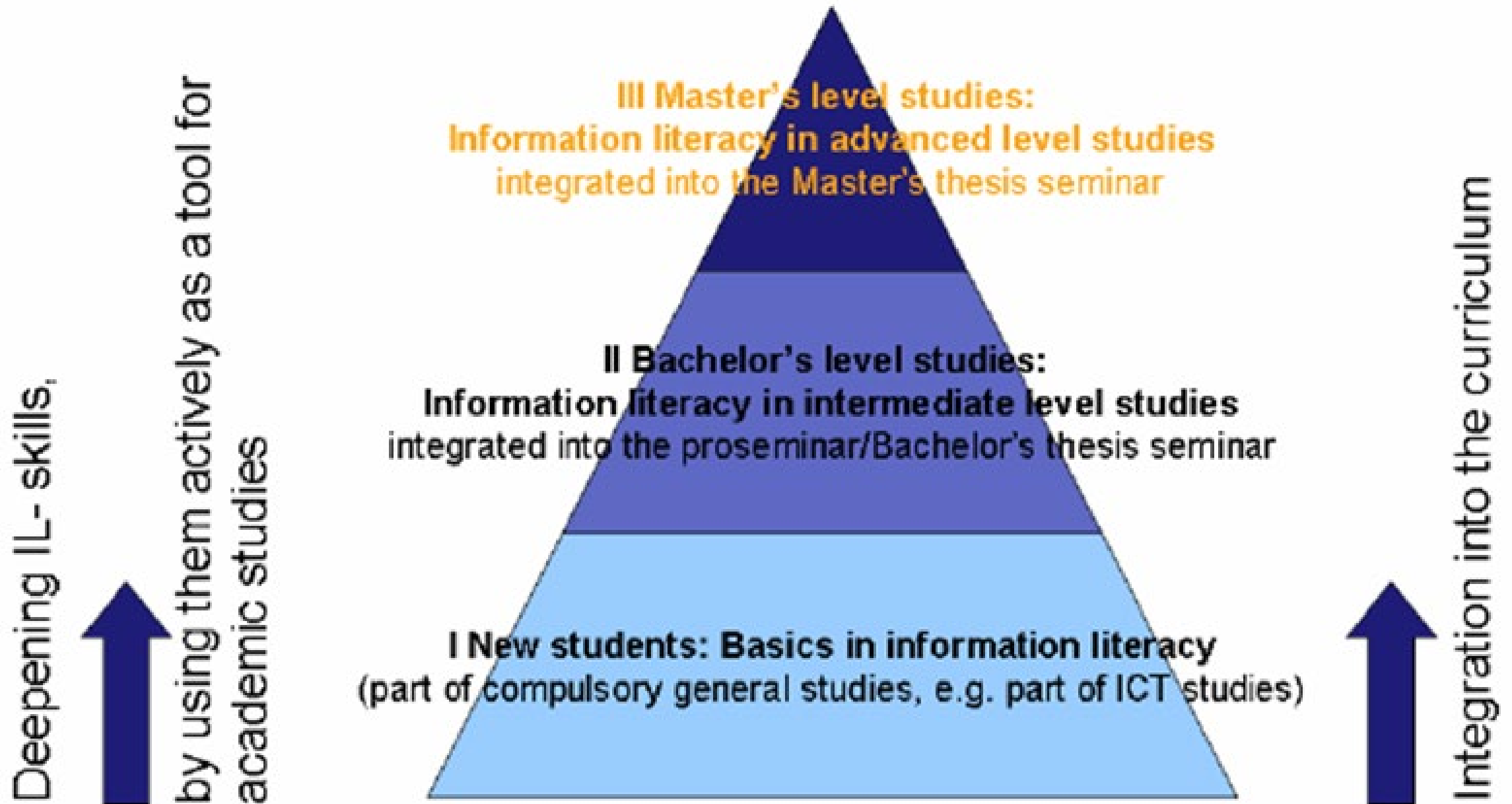
● 機会均等(equality)を重視する教育観

● 全国版の情報リテラシー教育のモデル

● 図書館員のための全国ネットワーク

実践事例やアイデアの共有／資質開発のためのプログラム

4.3 フィンランドの大学における情報リテラシー教育モデル



5. 今後の学習支援のために大学図書館に求められること

① 大学教育改革の動向について学内外の情報を収集する

中央教育審議会の動向や全学及び部局の教務委員会の議事を確認
他大学の取り組みを調査
→ 担当者を決めて情報収集し、他の図書館関係者と共有する

② 各大学で開催される教育関係の研修（FD）などに図書館員も参加する

授業設計の知識や方法，大学教育改革についての理解を深める
研修に参加している教員の意見を聞く機会にもなる

③ 図書館の管理職，非常勤職員を含む図書館職員，アルバイトやボランティアの学生が，それぞれの立場でリーダーシップを発揮しながら，学習支援の設計や実現に参画する。

④ ひとりひとりの図書館関係者が，大学内の関係者との接点を見つけ，時間をかけて丁寧に関係を構築することによって，大学図書館と大学との接点を増やし強化していく。

謝辞

本発表で紹介した事例の調査・研究については、次の助成を受けています。

● アーラム・カレッジ: 科学研究費補助金(若手研究B)「ファカルティ・ディベロップメントの視点を取り入れた大学図書館の教育支援機能研究」(2004年度～2005年度)

● ミシガン大学: 科学研究費補助金(若手研究B)「教育活動を背景とする教員と図書館員の協力関係: ミシガン大学の事例研究をもとに」(2006年度～2007年度) / 科学研究費補助金(基盤研究C)「大学教育の質保証を視野に入れた図書館員による教員との連携構築のための戦略」(2015年度～2017年度)

● タンペレ大学: 「大学教育における教員と図書館員の連携に関する比較研究: フィンランドの事例研究」日本学術振興会・特定国派遣研究者(フィンランド・長期)(2013年度) / 科学研究費補助金(基盤研究C)「大学教育の質保証を視野に入れた図書館員による教員との連携構築のための戦略」(2015年度～2017年度)

主な参考文献①

- Asplund, J; Hakala, E.; Sallama, S.; Tapio, S. Integrating information literacy education into the curriculum at the University of Tampere, Finland. *Nordic Journal of Information Literacy in Higher Education*. 5 (1), 2013, p.3-10.
- Association of College and Research Libraries (ACRL). “Framework for Information Literacy for Higher Education.” 2015. <http://www.ala.org/acrl/standards/ilframework>, (参照:2015-06-10)
- Bell, Steven J.; Shank, John D. *Academic Librarianship by Design: A Blended Librarian’s Guide to the Tools and Techniques*. American Library Association, 2007, 181p.
- 千葉浩之「教育先進国フィンランドの図書館に学ぶ学習支援」『大学図書館研究』No.101, 2014, p.35-43.
- 中央教育審議会. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申). 2012.8.28. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm, (参照:2015-06-10)
- 中央教育審議会. 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申). 2018.11.26. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm, (参照:2021-07-13)
- CILIP Definition of Information Literacy. *ILdefinitionCILIP2018.pdf* (infolit.org.uk) (参照:2021-07-08)
- Ducas, Ada M.; Michaud-Oystryk, Nicole. “Toward a New Enterprise: Capitalizing on the Faculty-Librarian Partnership,” *College and Research Libraries*, Vol.64, No.1, p.55-74, 2003,
- Eisenberg, M. B. and Berkowitz, R. E. *Information Problem Solving*. Norwood, Ablex, 1990, 156p.
- Grassian, E.; Kaplowitz, J.R. *Information literacy instruction: Theory and Practice*. 2nd ed. Neal-Shuman, 2009. 412p.

主な参考文献②

- Julien, Heidi and Given, Lisa M. “Faculty–Librarian Relationships in the Information Literacy Context: A Content Analysis of Librarians’ Expressed Attitudes and Experiences,” *The Canadian Journal of Information and Library Science*. Vol.27, No.3, 2002/2003, p.65–87.
- 鎌田均. “動向レビュー:「エンベディッド・ライブラリアン」,” *カレント・アウェアネス*, No.309, 2011, p.6–9. <http://current.ndl.go.jp/ca1751>, (参照:2015-06-10)
- 金子元久「学生本位になったが、学習本意ではない」IDE:現代の高等教育, No.625, 2020.11.
- 国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会. 高等教育のための情報リテラシー基準. 2015年版, 2015.3, 25p.
- Kuhlthau, Carol. “Kuhlthau’s Information Search Process,” *Theories of Information Behavior*. ASIS&T, 2005, p.230–234.
- 京都大学高等教育教育研究開発推進センター. 第26回大学教育研究フォーラム. <http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/forum/2019/> (kyoto-u.ac.jp)(参照:2021-07-08)
- Lowe, Carrie A.; Eisenberg, Michael B. “Big6 Skills for Information Literacy,” *Theories of Information Behavior*. ASIS&T, 2005, p.63–68.
- 松下佳代編著『<新しい能力>は教育を変えるか:学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房, 2010, 219p.
- 松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング:大学授業を深化させるために』勁草書房. 2015, 274p.

主な参考文献③

- 三輪眞木子『情報検索のスキル:未知の問題をどう解くか』中央公論社, 2003, 214p.(中公新書, 1714)
- 三輪眞木子『情報行動:システム志向から利用者志向へ』勉誠出版, 2012, 205p.
- 溝上慎一「学修成果の可視化から見える学生像」『大学教育学会第37回大会発表要旨集録』2015, p.60-61.
(公開シンポジウムの発表スライドも参照している。)
- 溝上慎一『高等学校におけるアクティブラーニング:理論編』東信堂, 2016, 128p.(アクティブラーニング・シリーズ, 4)
- 長澤多代「アーラム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に関するケース・スタディ」『Library and Information Science』No.57, 2007, p.33-50.
- 長澤多代「大学教育における教員と図書館員の連携を促す図書館員によるつながり方の開拓:アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに」『日本図書館情報学会誌』No.189, 2012a, p.18-34.
- 長澤多代「大学教育における教員と図書館員の連携を促すカスタマイズ型の学習支援:アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに」『日本図書館情報学会誌』No.192, 2012b, p.185-201.
- 長澤多代「ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ:フィールド・ライブラリアンの活動を中心に」『Library and Information Science』No.70, 2013, p.177-217.
- 長澤多代「大学教育における教員と図書館員の連携を促す教員に対する直接的な支援:アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに」『図書館界』Vol.67, No.4, 2015, p.228-243.

主な参考文献④

- SCONUL Working Group on Information Literacy. “The SCONUL Seven Pillars of Information Literacy: Core Model for Higher Education.” 2011,
<http://www.sconul.ac.uk/sites/default/files/documents/coremodel.pdf>, (参照:2015-06-10)
- 土持ゲーリー法一“能動的学修を促すファカルティ・ディベロップメント,”アルカディア学報, No.499, 2012.
<https://shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0499.html>, (参照:2015-06-10)
- 渡邊由紀子. CA1986 - 著作権リテラシーを育成する大学図書館. カレントアウェアネス, No.346, 2020.